

アフリカで学部生がフィールドワークすることの意味

ザンジバルにおけるフィールド実践とそのコンテンツ展開

長崎大学 増田 研

1. 授業科目としての「海外フィールドワーク実習」の位置づけ¹

海外フィールドワーク実習（以下、海外FW実習）は、多文化社会学部カリキュラムにおけるフィールドワーク・モジュール²の発展科目として設定された。このモジュールでは一年次前期の「講義科目である「フィールドワーク入門」および後期の「フィールドワーク基礎実習」を必修科目とし、その他、スキル別に用意された4つの実習科目から2つ選択することが要件とされている。海外FW実習はそれらの科目の上位に位置づけられるものであり、一年次から二年次にかけてのフィールドワーク教育の「到達チェック科目」としての機能をも併せ持つ。

海外FW実習は「選択科目」であり、学生たちはこれを履修しなくても卒業できる。コースによる縛りもない。夏休みの半分以上の期間を現地滞在で過ごすうえ、参加費は原則として自己負担である。このような不利な条件下にある海外FW実習はしかし、2年間に18名の参加者と、3名の教員、2人のコーチングフェロー（以下、CF）の全面的な関与を得て実現した。参画した教員学生は以下の者たちである。

科目担当教員：増田研（科目責任者）、波佐間逸博、鈴木英明

コーチングフェロー：阿部哲、牛久晴香（平成28年度）、寺野梨香（平成29年度）

参加学生（平成28年度）：新井裕奈、清田千尋、鈴木颯駿、高田真也、徳永翔太郎、中村彩菜、二石梨香、牧夕莉子、眞鍋愛

参加学生（平成29年度）：梶原拓樹、川床愛、川畑容、中村優平、永井優衣、羽田真紀代、眞木直樹、宮城敬、吉岡真唯

¹ 本稿は2017年3月に刊行した『ザンジバルに学ぶ多文化社会の生き方』（阿部・牛久2017）に掲載された拙稿「ザンジバルでの海外フィールドワーク実習：授業の企画と運営という観点から」（増田2017）を大幅に加筆・修正したものである。

² 2017年度に多文化社会学部が完成年度を迎えるにあたってカリキュラムは大幅に改変され、平成30年度からの新カリキュラムからは「フィールドワーク」の語は姿を消す。

海外FW 実習で授与できる単位はわずか一単位であったが、実際にこの実習にかけた時間と労力は膨大である。コーチングフェローによる指導報告にもあるように、私たちは3週間あまりにわたるザンジバル滞在のほかに、前期には準備セミナー、後期にはポストフィールドワーク・セミナーを実施した。ザンジバルでの活動時間、前後期で合計しておよそ20回にわたるセミナー、そのための準備、それらを合計すると180時間を超える。

参加した学生が執筆した論文のタイトルは次の通りである。(本稿執筆時点では、平成29年度の論文は執筆の最終段階にあり、下記に挙げる論文タイトルが2018年3月に刊行される予定の報告書に掲載されるものとは異なる可能性がある。)

平成28年度

- 新井裕奈・鈴木颯駿・中村彩菜・二石梨香「ザンジバルにおける多元的医療：人々がつなぐ土着医療と生物医療」
- 牧夕莉子「観光業における「ザンジバル島」の魅せ方：観光業従事者の視点から」
- 清田千尋「農業と観光業のクロスオーバー：ザンジバルのスパイスツアーに見られる観光資源の創出」
- 高田真也「ザンジバルにおけるティンガティンガ画家の試行と取り組み」
- 眞鍋愛「世界遺産の景観保存とホスト・コミュニティ発展の並存に関する考察：タンザニア・ザンジバル島ストーンタウンを事例に」
- 徳永翔太郎「ザンジバル中古車産業におけるビジネスネットワーク形成の柔軟性」

平成29年度

- 中村優平「ザンジバルにおけるマドラサ教育と女性の社会進出」
- 川畑容「ザンジバルにおける食器の変遷」
- 梶原拓樹「観光のなかのオーセンティシティ：土産物絵画「マサイペインティング」を事例に」
- 川床愛「ストーンタウンの一般家庭から見る手間と時間をかけた調理の実践：外食・中食産業の発展の観点から」
- 永井優衣「ザンジバルにおける多様な音楽とそこから見える社会の変化」
- 羽田真紀代「石の町に広がる木彫りの世界：ある職人の工房兼土産物店における調査」
- 眞木直樹「コミュニティ開発による小規模農家の発展：ザンジバル海藻農家の

事例から」

宮城敬「出稼ぎマサイが紡ぐ「もう一つの紐帯」」

吉岡真唯「農業と人々の関わりから見る農業の多様化」

2. 企画の経緯と準備段階

海外FW実習の標準履修年次は3年次であり、第一回目の開講は2016年度（平成28年度）であった。またここで紹介するザンジバルにおける実習は、当初から2年間に限定して実施されることが確認されていた。

私たちは2014年の新学部設立時から準備を始めていた。「私たち」というのは、科目担当者である増田、波佐間、鈴木の3名である。私たちはいずれもアフリカを専門とする人類学者・歴史学者であるが、アフリカのなかでも増田はエチオピア、波佐間はウガンダとケニア、鈴木はタンザニアのザンジバルと、フィールドが異なる。海外FW実習のコーディネートのためには現地の情勢に詳しいことが必要であるから、まずは上記の3ヶ国を渡航候補地として挙げた。数ヶ月にわたる検討を経て、実施地はタンザニア連合共和国のザンジバルと決まった。その理由は以下のとおりである。

第一に、ここが鈴木氏の長年の調査地であり、現地の事情に明るいことが挙げられる。また治安が比較的良好で、滞在にあたっての不安要因が少ないことも考慮された。数名の学生が個別に調査活動をするとなると、治安面での不安は可能な限り取りのぞいておきたい。そして、なによりもザンジバルが長い文化交流の歴史を持つ土地であり、多文化社会学部のフィールドワークの実施に適合的であることが大きな魅力として働いた。

さて、開講まで一年を切った2016年の4月に私たちは、学生に呼びかけて「海外フィールドワーク実習調査課題検討会」を数回にわたって開催した。現在までつづく非公式団体「アフリカハウス」は、そもそもこのために結成されたものである。いまだ開講していない科目、それもアフリカまで出かけていくフィールドワーク実習科目ではあったが、受講を検討していた潜在的受講生たち10数名は数回にわたって検討を重ね、レポートを仕上げた。

また、2016年6月には明星大学の菊池滋夫教授に講演をお願いした。菊池教授は長年にわたってザンジバルでの短期間滞在プログラムを実施しており、その体験を聞いて私たちはますますザンジバルへの期待を膨らませたのである。

その年の8月には、教員3人と阿部哲CFがザンジバルに赴き、現地を視察するとともに、ザンジバル公立大学（the State University of Zanzibar）³との交渉を

行った。学生たちが仕上げたレポートはこの現地視察でおおいに生かされた。

3. ザンジバル公立大学

2015年8月に視察を行ったさいの重要ミッションはふたつあった。第一のミッションは、学生たちが仕上げたレポートに基づいてその課題調査の実現可能性を見極めることである。学生たちが関心をもつテーマには観光、イスラーム教、産業、社会開発といったテーマが並んでいたが、そうしたテーマに関する調査が果たして実現できるのか、スワヒリ語を学んでいるわけでもない学生たちがインタビューや観察をする機会を持てるのか、そうしたことを見極めることが必要であった。

もうひとつのミッションは、ザンジバル公立大学との協議である。3週間にわたるフィールドワークを実施するには、現地にアフィリエイト先としての受け入れ大学が必要である。また、私たちは現地における合宿生活を目論んでいたが、ザンジバルでは民間人が許可なく外国人を泊めることは違法とされるので、この辺りの問題をクリアするためにも受け入れ機関を持つことは必要であった。これらの点において、私たちの海外FW 実習は、旅行代理店の手配によるいわゆるスタディーツアーとは大きく異なる。

ザンジバル公立大学 (SUZA) は、スワヒリ語の研究教育で知られる歴史ある教育機関であるが、大学としての歴史は浅く、まだ20年足らずである。だが、日本人を含む世界中の研究者がここをアフィリエイト先として選択しており、私たちにとってもほぼ唯一の交渉先であった。私たちとSUZA とをつないでくれたのはザンジバル在住の研究者である宮崎久美子氏であり、交渉窓口に立ってくださったのはGlobal Center for Swahili Studies and Advancement, the State University of Zanzibar に勤めるレヘマ・ムウィニイ (Rehema Mwinyi) 氏であった。

その後、私たちは長崎大学とSUZA との交流協定を準備したが、諸般の事情で2016年のザンジバル渡航には間に合わなかった。そのため、学生たちの調査をきちんとした調査許可のもとで実施するために、学生全員が調査計画を英語で説明する文書をSUZA に提出し、上記のセンターの客員研究員として受け入れてもらった。

SUZA から得られた便宜は多岐にわたるが、ここで触れておきたいのはアタッチト・パートナー (Attached Partner、以下 AP) の手配である。いわゆる先進

³ SUZA に関してはこれまで「ザンジバル州立大学」の日本語訳を宛ててきたが、ザンジバルが単一の州ではないことに鑑みて、本稿ではザンジバル公立大学の名を宛てている。

国のような、研究リソースが整備された環境とは異なり、アフリカでは調査を実施するに当たってアフィリエイト機関から研究カウンターパートを指定されることがある。SUZA が手配した AP は、その多くが大学事務や観光業を本業とする社会人大学院生である。ザンジバル在住者である AP たちの土地勘や人脈が学生たちの調査活動を円滑にしたことはいうまでもなく、彼らの通訳なしには成り立たなかったインタビューも多い。

4. 指導体制、とくに CF の積極的関与

海外 FW 実習の担当教員は 3 人であるが、フィールドワーク・モジュールが 2014 年にスタートした時点で、この実施に CF が関わることは織り込み済みであった。CF はフィールドワーク科目における学生への指導や英語カフェ、担当する学生のケアにいたるまでの業務を担当しており、教員と比べるとずっと多忙である。阿部、牛久（平成 28 年度）、寺野（平成 29 年度）の 3 名の CF には、海外 FW 実習の実施にあたって学生指導の中心的役割を果たした。CF がいなかったらこまめに調査指導をすることなどできなかっただろう。

学生指導の部分を全面的に CF に移譲することは、教員 3 人での話し合いの結果である。多文化の 7 つのコンポーネントからなるが、そのほぼすべてに関与しているスタッフは CF だけであり、発展科目としての海外 FW 実習を、モジュール全体の流れの中で把握できるのもまた CF だけなのである。

このことの見据えていたことは 2 つある。ひとつは若い研究者であり、教育者である CF の教育経験値を上げるというキャパシティービルディング。もうひとつは、学部教育における CF の本格的な教育への参入を事実化することである。3 名の CF は、自らの研究経験に基づいた丁寧な指導を実践したし、ともに研究者である教員と CF の、職階区別にこだわらない人員配置ができたことは、学部における学生指導のあり方をめぐる一つの試みとして意義あるものだった。

5. 渡航手配と合宿生活

ザンジバルでの滞在は約 3 週間、往復の移動を含めて一ヶ月弱の行程である。いずれの年も到着当初の 3 泊のみ現地順応のためにホテルに宿泊したが、そのあとは帰国するまでギリッシュ・ザレラ氏の私邸にホームステイをした。居候生活をしたのは学生 9 人とスタッフの計 12 名で、ギリッシュ邸の部屋やマットレス、台所、トイレ、シャワー、洗濯機、電気、ガス、水道などを自由に使わせてもらっ



【図1 平成28年度の参加者】



【図2 平成29年度の参加者とギリッシュ氏】

た。ギリッシュ邸にはほかにも滞在者があり、私たちの滞在期間中にも数名が常にこの家で部屋を間借りしていた。

この合宿形式発案したのは鈴木である。ギリッシュ邸は世界遺産グレードⅡの建物二棟をリノベーションした作りで、部屋数が多く、設備も充実していた。セキュリティについても問題はなかった。ギリッシュ邸には出入りが3つあり、そのすべてがきちんと施錠されていた。インド系ザンジバル人であるギリッシュ氏は英語に堪能で、私たちにとってはコミュニケーションの問題がない。また私たちの居住許可取得のために各所を奔走してくれた。

こうした合宿生活をもたらしたものはなんだろうか。当初の目論見は、買い物と炊事を自分たちですれば、より現地の生活に馴染むだろうという簡単なものだった。また、外食続きになるホテル暮らしが参加者の相互交流を阻害する可能性や、お金を払って提供される食事を食べ続ける退屈さも心配だった。その点で合宿生活には多くのメリットがある。

健康面では、参加者各自が少なくとも一度は吐き気、腹痛、発熱などの体調不良に見回れたが、大事に至ることはなかった。もちろん旅行保険には全員が加入している。

合宿生活を円滑に進めるためにいくつかの取り決めを作ったが、いずれも簡単なものに留めた。食事や買い物などの当番分けは、学生が自主的に行った。また会計担当を置き、全員が一律に供出した基金（通称「プール金」）によって家計を一元管理した。CFによる報告にもあるように、夕食を全員で一緒に食べることと、その後のセミナーで一日の調査内容を報告することがスケジュールに関する最低限のルールであった。

料理はその日担当する学生が市場に買い物に行き、メニューを決めた。朝食はパンなどで軽く済ませ、昼食はそれぞれが出先で外食したので、全員がそろって食事するのは夕食に限られた。ザンジバルの食料品価格は安く、肉、魚、野菜、

酒など、いずれも私たちの財布にやさしい値段でたくさん買うことができた。知り合った人々がいろいろな食材（マグロ、タコなど）を差し入れてくれたこともある。

昼食はだいたい外食だったが、ストーンタウンには安くてうまい食堂や屋台がたくさんあるため、食事に困ることはまったくなかった。

滞在中には各地へ出かけ、多くの人々と交流する機会があった。ドレ村のハクナマタタ農園へは、いずれの年にも全員で訪れている。ザンジバル映画祭実行委員会のマーティン氏や、ザンジバル保健省モハメド・コンボ大臣への面会など、全員で挨拶に出かけたこともある。滞在最終日には、東海岸のパジェに足を運び、美しいインド洋に上る満月を眺めたり、バーベキューを楽しんだりもした。また兩年ともに、滞在期間の最後には近所のレストラン「サンライズ」の屋外スペースを貸し切りにし、お世話になったSUZAの人々を招いての感謝パーティーを開催した。

こうした活動は、逐一 Facebook のページ「多文化社会学部アフリカハウス」(<https://www.facebook.com/sghssafricahouse/>)にて報告され、在学生や、留学に出ている同級生らから感想をもらったりもした。

6. 論文集と副産物的成果

第1回の海外FW実習では成果発表の機会として、11月に写真展&ギャラリートーク「It's Zanzibar Style」、2月に研究成果報告会を実施し、2017年3月に報告書「ザンジバルに学ぶ多文化社会の生き方」（阿部哲・牛久晴香編）を刊行した。2年目は2017年11月にパネル展示を多文化ラウンジにて、12月に写真展&ギャラリートーク、それに「ティンガティンガ&マサイペインティングワークショップ」を附属図書館ギャラリースペースで開催した。平成28年度には、長崎新聞と毎日新聞、それに附属図書館の広報誌にも記事が掲載された。

2017年の写真展では、高田真也と梶原拓樹による絵画ワークショップも同時開催された。これは後述する高田のプロジェクトの一環として位置づけられ、高田はティンガティンガ、梶原はマサイペインティングと、それぞれがザンジバルで習得した技法を用いて、来客が小さな作品を仕上げるという試みである。来場者のなかには長大の学生のみならず教職員もおり、そのお子さんたちも含めるとおよそ75人が、合計で100枚近い作品を仕上げた。

平成28年度実習の報告書は150部印刷され、学内のみならず、学外にも広く配布された。また2017年5月には日本アフリカ学会の学術大会において、海外フィー

ルドワーク実習の取り組みを紹介した（増田ほか2017）。

参加者の一人である高田真也は、帰国後もティンガティンガを描き続け、2016



【図3 平成28年度の調査活動報告書（阿部・牛久2017）】



【図4 写真展&ギャラリートーク
「It's Zanzibar Style」 2016年11月】



【図5 平成28年度研究成果報告会 2017年2月】



【図6 平成29年度パネル展示 帰国直後の2017年10月に多文化ラウンジにてポスターパネルを展示した】



【図7 写真展&ギャラリートーク「ハクナマタタ・ザンジバル」 2017年12月】



【図8 ティンガティンガとマサイペインティングのワークショップ風景 2017年12月】

年10月および2017年5月に開催された「ポレポレトーク&ライブ」（主催：アフリカハウス）の会場において、作品の一部をオークションにかけることができた。出品された作品はすべて入札され、その売上金はアフリカハウスの「ハイキーパーズ支援基金」（後述）に組み込まれた。また、高田はアフリカハウスと連携して、長崎大学の「夢の架け橋」プロジェクトに「長崎×タンザニア～現地アートを紹介して知る・伝えるアフリカの魅力～」を申請し、採択された。

ところで、ティンガティンガの売上金は、ザンジバル市マゴメニ地区にある子供たちの英語塾「High Keepars New Vision Class」（私たちは「ハイキーパーズ」と略して呼ぶ）の支援に充てられた。この私塾との出会いは偶然である。2015年8月の視察の際、空き時間にフォロダニ公園を散策していた増田が、3人の男子高校生と出会ったのが発端であった。その後、2015年には増田、波佐間、鈴木、阿部の4名が、2016年と2017年には参加者のほぼ全員がハイキーパーズを訪れて交流を深めた。

さきにハイキーパーズを「英語塾」と記したが、ここは実際には授業料無料の寺子屋のような場所である。主催者は地域で尊敬を集める人物で、講師として参加している若者たちはみなボランティアで授業をしている。ハイキーパーズには「A」と「B」があり、「B」は公立学校の空き教室を借りて開催されているが、「A」は住宅地のなかの、家屋と家屋の隙間にある空間で行われている。私たちが訪れていたのはこの「ハイキーパーズA」のほうで、壁と床はあるものの屋根はなく、夜間（クラスは毎日夜の7時から始まる）には電球一つだけで明かりを得ている。私たちはこれを「多文化の英語カフェのザンジバル版」と位置づけ、今後も何らかの形でこの学校を支援したいと考えている。これも海外FW実習の副産物であると言えよう。



【図9 平成28年度のハイキーパーズにおける英語カフェ 2016年9月】



【図10 平成29年度のハイキーパーズにおける英語カフェ。ハイキーパーズのAとBが合同で実施されたため、参加者が100名を超えた。 2017年9月】

7. フィールドワーク教育実践がはらむ意味

グローバル人材の育成がお題目となっている日本の大学業界において、圧倒的なマジョリティーは欧米の大学への留学を志願する。それは多文化社会学部でも同じである。他方で、フィールドワーク教育や現場力の涵養が唱えられているものの、アカデミックな面において発展途上の学部生をフィールド実践に導くとはどのようなことであるか、そのことはあまり真剣には考えられてこなかった。

本学部では東アフリカという「非・欧米」で、しかも、授業を受けるのではなく、自ら課題を選定し現場に出て行く教育を実践してきた。このことの意味は何であろうか。

ひとつの意義は、この学部における教育コンテンツが、「先進国を学ぶ」という文明開化モデルに則っていないことと関連する。多文化社会学部は、英語の教育にひとつの重点を置いたカリキュラムを持ちつつも、英語を「ツール」と位置づけ、言語習得そのものを目的化していない。学部の専任教員たちが用いることのできる言語数は20近くに上り、多くの教員が研究活動において2言語ないし3言語以上を使用する。授業などで使用される英語だけを取り上げてもアメリカやイギリスといったスタンダードな英語のみならず、多種多様な英語を耳にすることができる。それこそがグローバル化した世界に表面化した特徴的言語環境であり、そうした脈絡のうえでは、たとえば東アフリカにおいて英語と習いたてのスワヒリ語を用いて参与観察を実行するというのも、「現場への参加の方法」としては当然のものとなる。

このように考えれば、(欧米と違って) さほど世界に影響力があるとは言えな

いアフリカに出向いてフィールド実践に身を投じることが、それほど奇妙な選択ではないことが分かるだろう。フィールドワーク実習をアフリカで実施することを、派手に目立つための飛び道具的なものだと思う人がいたら、そういう認識のほうが修正を必要としていることを知るべきだ。

2年間にわたってザンジバルで実習に参加したのは、多文化社会学部の1期生と2期生である。参加者の多くは社会動態コースを主専攻としていたこともあり、ザンジバルから戻ったあとの、後期の専門演習やその他の機会において、担当者以外のたくさんの教員からアドバイスや示唆を受ける機会を持った。言い換えれば、科目としては海外FW実習単体のフィールドワークでありながら、学部あるいはコース全体で面倒をみたという印象がある。

学生たちが執筆した論文は、学術的な面からみて十分な水準に達したとは言えない。人類学者である私自身の感覚からも、もっとデータを集めて分厚い記述に導きたかったという反省もある。これはしかし、現地滞在期間の短さを考慮すれば致し方ないだろう。だが、学生たちの課題設定やその意義を見渡してみると、いずれも従来のザンジバル社会研究にはなかった視点、視角、アプローチがかならず埋め込まれていることにも気づく。スワヒリ語を学んで、あと半年調査を続けていれば卒業論文の水準を超えるだろうし、一年継続すればジャーナル掲載も夢ではない、そういう課題を彼らは見つけてきた。ミクロな事象を確かめ、それをマクロな展望のなかに位置づけることは、プロの研究者にとっても簡単なことではない。成果とりまとめの過程で、多くの学生が「ああ、もう一度調査したい～」と口にしたのは、そうした難しさを体感したからであろう。

こうしたプロセスは、フィールドワーク活動が大学生の知的鍛錬として過大ともいえる刺激を与えていることを、筆者に知らしめる。フィールドワークは単に「現場に行って見てきた」だけでは済まされないインパクトを与える。現場を体験することの意義は言うまでもないが、その体験をアカデミックなスタイル習得に結びつけることにこそ、フィールドワーク教育の核心がある。私たちの取り組みに即して言えば、準備セミナーから現地滞在を経て、ポストフィールドワーク・セミナーへといたるプロセスが「ホームとフィールドの往還」の役目を果たし、論文に収まりきれない要素が写真展やギャラリートークの形で噴出する、そうした流れ全体がフィールドワーク教育の在り方を如実に示しているとも言えるのだ。

もちろん、この取り組みにも課題は多い。

こうした成果発信に対する反響は学内・学部内よりも外部、とりわけアフリカを研究する大学教員たちと、フィールドワーク指導に熱意をもって取り組む日本中の若手人類学者たちから多く寄せられた。そのほとんどは、3週間もの長きに

わたって学生と共同生活を送りフィールドワークを実施した労苦とその成果に対する賛辞であったが、同時に、その労苦ゆえに「うちの大学では不可能である」というものも多くあった。筆者としても、3人の教員、2人のCFという贅沢な陣容を駆使し、現地の大学の協力を得ながら実施される一年間のプログラムを継続的に開催できるとは考えていない。本稿の執筆時点では最初の参加者たちはまだ卒業しておらず、私たちの取り組みが個々の若者の生き方にどのような影響を与えたかという点を評価することもできない。いわば、海外フィールドワーク実習の発展性や継続性、持続可能性はいまだに問いにさらされているのである。

海外フィールドワーク実習は、ひとつの授業科目としての存在意義を超えて、多様な活動とコンテンツ展開をもたらしてくれた。それはひとえに科目責任者を支えてくれた教員（鈴木・波佐間）と、有能なコーチングフェローたちの助力を得て、皆がもちよったアイデア、汲めども尽きない情熱と行動力、そして多方面からの支援があつてこそ実現できたのである。学務班からはザンジバルへの渡航にあたっての手續きに関して、総務班からは報告書の刊行に関して、そして、学部長からは教員・CFの現地渡航に関して、多種多様な配慮をいただいた。それでも足りない部分、たとえば予算面などで支出が難しい面については、教員の個人的な研究教育資金を駆使し、ときには私費によって活動を支援することも必要であった。これだけの多様なコンテンツ展開をするとすると、四角四面な国立大学の予算支出プロセスでは対応できないことも多い。こうした事実もまた、この2年間の実践がそのまま持続可能なものではないことを示している。

最後に、科目責任者の立場から、阿部哲、牛久晴香、寺野梨香の3名のコーチングフェローに対する賛辞を添えたい。また、ザンジバルへの渡航はかなわなかったが、準備段階において学生たちに大いなる影響を与えた河内久実子氏にも礼を述べたい。阿部氏は中東、河内氏は南米、牛久氏は西アフリカ、寺野氏は東南アジアと、それぞれのフィールドは異なるが、いずれも有能なフィールドワーカーとして現場から発信してきた経験を抛り所とし、多文化社会学部生のフィールドワークに貢献してくれた。

コーチングフェローの献身的な、惜しみない協力を得て実践されてきたザンジバルでの海外フィールドワーク実習の、多様なコンテンツ展開と可能性をはらんだ教育実践が、いずれは日本の大学教育におけるフィールドワーク教育のモデルとなることを、筆者は夢見ている。

参考文献

阿部哲・牛久晴香（編）

2017 『ザンジバルに学ぶ多文化社会の生き方』長崎大学多文化社会学部

増田研

2017 「ザンジバルでの海外フィールドワーク実習：授業の企画と運営という観点から」

阿部・牛久（編）『ザンジバルに学ぶ多文化社会の生き方』長崎大学多文化社会学部、pp. 200-207

増田研・牛久晴香・阿部哲・波佐間逸博・鈴木英明

2017 「ザンジバルにおける学部生の現地調査と学びの広がり：長崎大学多文化社会学部「海外フィールドワーク実習」の実践の報告（Development of Field Research Activities of Undergraduate Students in Zanzibar: A Case from “Overseas Fieldwork” at Nagasaki University）」、日本アフリカ学会第54回学術大会、2017年5月20-21日、於：信州大学教育学部